

日本映像民俗学の会—発足によせて

残存の事象記録、新しい都市文化も追求

野田真吉

民族学あるいは人類学においても、その始めは好奇心にみちあふれた旅行者、未踏の世界に憑（つ）かれた冒険者、探検者たちがもちかえった各地の人間生活の奇異な見聞記に、その発端をみることができる。我が国の民俗学も同様で、さまざまな旅行記や各地方に居住している好事家が日常生活のなかにみかける風習や伝承行事、口碑民話などに興味をもち、それを調べたり、書きどめたりしたことからはまった。そうした先達たちの「記録」が積み重なっていくなかで、次第に独自の学問的領域、学問体系をととのえ、今日の民族学、人類学、民俗学が形成されたことはご存知の通りである。

ところで、記録映画をつくっている私が民俗学に近づいていったのは、学問的な追究といった大上段な心構えからではなかった。記録映画を志向する者ならだれでも、人間的事象（社会的、文化的事象）に対する好奇心、未知の世界への探訪衝動、つまり前述した民俗学などの出発点となり、研究者の初心ともいえる「もの好きな人間」の発意や行動にみられた同質な気質をもっている。だから、特に日本人の生活意識の深層を歴史的にさぐってみようと思っていた私の場合、記録映画の制作過程のなかで、もの好きな気質を媒介として、ごく自然に民俗学に近づき、結びついていった。私にとって民俗学への関心は、私の記録映画づくりとうらはらな関係をもつに至った。

さて、我が国の民俗学の調査研究における記録手段は、以前からハンドライティング—ペンとノート、それに普通写真のカメラが一般的な記録手段であった。主として文章と絵画、写真による記録であった。だが、これらの記録手段は対象の動態的記録の欠落がまぬかれない。「百聞一見にしかず」という具象的、即物的な表現をともなわない。また、対象となる人間の表情や動作のすみずみにしめされる、心意のデリケートな動きなどもとらえきれない。以上このようなハンドライティングの欠陥を補完する有効な記録手段として、私たちは現在、映画やビデオの映像による記録手段をもっている。

戦後、1960年以降、とくに16ミリや8ミリのカメラ、テープ録音機器、カラーフィルムなどの急遠な技術的開発と進捗で、映画がだれでも手軽に使えるものになった。さらに、ビデオの進出は映像記録手段の分野を一層ひろげた。民俗学のフィールドワークの記録手段にハンドライティングと映像記録の複合的効果が可能になった。だが、時を同じくして、皮肉なことに、我が国の高度経済成長による近代化、都市化はもっぱら農民生活を対象とした民俗学のフィールドに大きい変化をもたらした。離農、都市化現象は日に日に激化した。当然、農民の日常生活態—民俗学でいう「ケ」と、祭礼などの伝承行事、儀礼つまり非日常生活態の「ハレ」との生活のサイクルが乱れ、分断され、解消、廃絶の危機におちいった。このことはまた民俗学の研究進展における危機、デッドロックであった。

私は民俗文化に心をよせる—記録映画作家として、ひん死の状態に残存する民俗学的資料と

なる題材に急ぎ取り組もうと思った。自主制作で「冬の夜の神々の宴―遠山の籍月まつり」(70年)、「雪は稲の花である―新野の雪まつり」(74年より制作中)を撮影した。私と同じように記録映像作家―北村皆雄は「神屋原(カベル)の馬―イザイホーの神事」(69年)、「アカマタの歌」(73年)など沖縄の民俗をとりあげた作品を自主制作した。

私たちの民俗学的な作品が仲介となって、かねがねから民俗学における映像記録に強い関心を持ち、民俗学の新しい展開に意欲をもやしていた野口武徳成城大教授、宮田登筑波大助教授と知りあった。私たち4人は、ここ数年間、民俗学と映像記録に関する諸問題を話しあってきた。そこでの問題点を私なりに要約してみよう。諸外国ではすでに映像民族学が確立しているが、我が国の民俗学の研究に映像記録が積極的に活用されていないのはなぜか。問題は民俗学のフィールドの崩壊による研究方向のゆきづまりと、将来の展望に深くかかわっているのではなかろうか。村の都市化現象と都市における新しい生活文化現象の進展に、民俗学はどのようにたちむかうか。

これら問題は多くの人々との討論を経る必要があるだろう。だが当面している課題として残存する民俗を民俗学視点から緊急に映像記録し、同時に新しい都市文化であり、広い意味の民俗文化である現在の流動する民俗をも記録し、研究する必要があるのではないか。それは農村の生活文化に対して民俗学が果たしてきた業績と同じに、今日に生きている私たちの任務であり、重要な研究課題であろう。このような諸事象を記録し研究するには、映像記録が最も有効である―といったことを私たちは話しあった。

そこで、私たち4人は民俗文化に興味をもつ多くの同志とともに問題を追究し、「映像民俗学」の理論と方法の確立に努めようという趣旨から、8月16日下伊那阿南町で「日本映像民俗学の会」の発足総会をひらくに至った。映像民俗学の確立は民俗学の新しい視野の展望にかかわり、民俗文化に関心をもつ記録映画作家の私にとっても大切な仕事だと思っている。

(のだ しんきち・記録映画作家)

<「日本映像民俗学の会」の第1回総会は、16日午前10時から下伊那阿南町新野、伊豆神社御厨でひらく> 【信濃毎日新聞 昭和53(1978)年8月6日号】